
Luxlunae

麻祁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u x l u n a e

【Nコード】

N 4 9 4 6 M

【作者名】

麻 祁

【あらすじ】

蒼い月の下、一人の女と出会った。女は俺を助けた後、額に銃口を押し付けて来た。それは今朝見た悪夢の続き？——本当に今日是最悪の日だ。

序章：ネクストミッション

「入るぞ」

その一言と共にドアが開き、一人の女が入ってきた。

女は部屋に入るなり、ドアを荒々しく蹴り閉め、音を響かす。

部屋の真ん中には、長方形の机が一台置かれていた。脈打つ木目に潤う褐色の肌が、辺りに古めかしい雰囲気漂わしている。左右には肘掛け付きのソファーがその机を挟む様に構え、部屋の中央奥には、それら全てを見渡す様に、両袖付きの立派な机が居座っていた。

その机に男が一人。椅子に座り、机に立てた右腕の人差し指で、右目に掛けられた眼帯を頻りに叩いては、入って来た女を睨み付けている。

その視線に女は、気にする様子など見せず、長く伸びた灰色の髪をなびかせながら、ソファーを目指した。

「はぁ……」

右側のソファーに着くや否や、深いため息を漏らしながら、腰を下ろす。それと同時、

「おいおい、まだ入っていいとは言っていないだろ？」

どつしりと座り込む女に向かって、眼帯の男が呆れたような声を上げた。

「そうだったか？」

そう一言。男の言葉を軽く受け流した女は、ソファーの背もたれに両腕を大きく広げ、足を組んで天井を仰いだ。

「はぁ……」

その姿に、眼帯の男が頭を押さえ、ため息をつく。

「それよりも、何か用事があるんだろ？ なければさっさと戻ってシャワーでも浴びたいんだが？」

「そう急くな、すぐに話は終わる」

急かす女を男は落ち着かせ、再び眼帯を数回叩いては言葉を続けた。

「——っと、そういえば、今回の依頼はどうだった？」

「んあつ？ 最悪だ。内容は簡単で良かったが、なんせ場所が遠すぎる。おかげで余計に疲れた」

「そうか、それは——大変だったな」

「……だろ？」

そう言つて女は左腕を軽く広げ、ため息混じりの表情を男に見せつけた。

「それじゃ、次の依頼もすぐに終わらせてくれるな？」

「ん？ ちよつと待て、話が……」

突然、女の目の前に何か飛び込んできた。視線が真ん中の机に移る。

机の上には、レポート用紙が数枚。一枚一枚どの紙にも、味気のない文字がビッシリと敷き詰められており、ホツチキスで一つに纏められている。

「なんだこれは？」

女は怪訝そうな表情でそれを手にとり、一枚ずつ目を通し始める。「だから、次の依頼だ。今回は場所も近いから、疲れなくて中々のはずだ」

「確かに近いな……。この近辺だ」

「そうだ。依頼内容は調査とその原因の排除。詳しい事はその資料に書いてある。目を通しておけ」

「……、——なるほど」

女は資料を途中まで読み終わると、そのまま机に放り投げた。

「それで、なぜ私がこの依頼を？ これぐらいの事なら、私がしなくとも……」

「あいつが現れる可能性があるからだ」

「……」

その言葉に、突然女が押し黙る。

「アイツとなれば、お前以外に誰がいるんだ？」

続け様の男の言葉に、女が顔を下に向け、何かを考え始めた——数分後。

「……確かに私以外にいないな。——了解した」

そう言つて、女はソファーから立ち上がり、ドアに向かって歩き始めた。その返事を予測していたか、男は表情一つ変える事なく、去り行く女の背中に向かって坦々と口を開く。

「よし、それじゃ明日から……」

「——」

突然、女が言葉を遮った。

「へっ？」

その予想外の出来事に、呆気にとられた男は言葉を失った。

女はその表情に微笑みながら再びその言葉を呟き、部屋を後にした。

——だから、断ると言っただよ。

第一章：アサギシキ

暗く深い潜在の底から、

「……………？ ……うつ……………？」

俺の意識が目覚めた。

ゆっくりと開く瞼。黒と青が混じったような色が、ぼんやりと広がっていく。それが完全に開ききった時、

「……………ん？」

俺は小首を傾げた。

目の前が、妙に黒く霞んで見えるのだ。……………ぼやけているせいなのだろうか？ 軽く目を擦り、それに視点を合わせてみる。

徐々に視界が澄み行く中、

「……………ッ！？」

俺は一瞬にして息を呑んだ——瞳だ。

まるでルビーのように不気味に照り輝く瞳が、俺を睨み付けるように見つめていた。瞳の周りは黒く霞み、はつきりとした姿は見えない。

その奇妙な光景に俺は呆気にとられてしまい、何も出来ず、ただジッと瞳を見返していた。それに対し瞳も、時折瞬きを繰り返すだけで動く気配がない。

お互いが見返す中、ふとある物が目に入った。瞳の奥、影の向こう側にぼんやりとした薄明かりが見えたのだ。俺は瞳から目を逸らし、その明かりに向けた。

黒の霞から、ちらちらと見え隠れしている明かり。どうやら、灰色の棒の先に……………まさか。

その『正体』が分かった瞬間、俺はすぐさま辺りを見渡した。左右に見えたのは大きく広がる道。褐色の地肌がどこまでも続き、終わりが無い。前後は幾つにも重なった木々達が覆い茂り、その先を見せる事なく道を挟む様にして生え並んでいる。

そして、丁度俺の背中辺りには、瞳の後ろにある物と同じ、灰色の棒が立ち尽くし、その先に付けられた灯りを照らしては、座り込む俺の体を支えていた。

見覚えのある景色。遠くもなく俺の身近にある場所……、ここは……公園？

ふと頭上を見上げてみると、そこには二つの明かりがあった。一つは小さな豆電球。そしてもう一つ……、大きな満月が俺を静かに見下ろしていた。

蒼白く照り輝く望月が暗い夜を淡い紺へと変えている。それは今、ここが『外』だという事を伝える明らかな証だった。

しかしなぜ？ 確か、風呂から出た後、俺はすぐさまベッドに潜り込んだはず……。それに、もし外に出たとしてもなんで公園なんかにいるんだ？ 一体何の為に……？

考えれば考えるほど話が噛み合わず、頭の中でこんがらがっている。仕方なく意識を前に向けた時、あの存在がいる事を思い出した。そういえば、あれは一体誰なんだ……？

先ほどから変わりなく俺を見据える紅の瞳。やはり、体の辺りには黒く霞み、姿は見えない。

最初目にした時は一瞬驚いたが、今改めて見るとその不気味さがじわじわと伝わって来る。本当に人……。そう考えた瞬間、体中に寒気が走った。

……何故、俺はアレを『人』だと？

もし誰かがアレを改めて見た時、『人』だと答える者はいるだろうか？ 否、今の俺ならこう答える。

「化け物」

だが、俺を見ているあの瞳。あれは確かに人間の目だ。紅く染まるも、獣ではないのが感じ取れる。それじゃ、どうしてあれほど紅いのだろうか？

充血……。いや、違う。それにしても紅すぎる。まるで絵の具で塗りたくっているような色だ。考えられるとしたら、病気が何か……

…、そんな病気が存在するのだろうか……？

見れば見るほど、不気味な目。その目を見続けていると、徐々に自分との距離が縮まっている……ような気がしてくる。

今更ながら、俺は身の危険を感じ、その場からすぐに立ち去ろうと足に力を入れた。

「……？ あ、あれ……」

しかし、どうした事か。何度立ち上がろうとしても足に力が入らず、その場に居座り続けていた。

何だ……、この感覚は……。

それは奇妙な感じだった。正座など、普段起きるような痺れだとか、極端に言えば、接着剤が何かで接着されたとか、そんな感じじゃない。まるで立ち上がるという動作自体を忘れてしまったかの様に、気持ちだけが先行し空回りし続けている。

何かされ……。

「——！？ ガアッ！！」

突然、何かが俺の喉を圧迫して来た。

「グッ……」

力を入れられる度、濁った声が漏れだす。

滲む視界の中、俺は咄嗟に右手を出し、押さえる物を掴んだ。

「……ッ！？」

その瞬間、驚愕した。

——腕だ。掴んだ手に伝わる、骨と皮。無駄な肉付きがなく、すらりと伸びるそれは、まるで鉄パイプのように細い。

それに驚いた事はそれだけじゃない。それともう一つ、その腕の先、『俺の首を絞める』と腕に直接的命令を下した元。あの紅い目が俺の間近まで迫っていたのだ。

距離からして、数十センチ。瞳と瞳が交じり合い、それを直視した俺は一瞬捕らわれるも、すぐさま抵抗するように握り締めた腕に力を入れた。

しかし、首に掛けられた手は決して緩む事がなく、冷たさだけを

ただ広げていくだけだった。

「グッ……」

抵抗も虚しく、体は背中にある棒を伝うようにして、徐々に持ち上げられていく。冷たい肌が背中を撫でるように過ぎて行き、それがある場所で止まった時、俺はそれを見下ろしていた。

ぼやけた下目遣いの視界に、微かに映る紅い瞳。人形のように何も出来ない俺を持ち上げているこの冷たい手の持ち主は、その目を逸らす事なく、俺をじっと見上げている。

その光景の中、ふとある物が目に入った。それは紅い瞳の後ろに存在し、風もないのに時折なびいては光の波をうねらせている。下目遣いでハッキリとは見えない、だがそれが何なのかはすぐに分かった。

新たに出現したワード。それに関連する言葉を見つけた瞬間、俺の口から思わずそれが零れた。

「お、おん……な……が？」

「——！？」

突然、喉に掛けられていた手が離され、支えを無くした俺の体は地面へと落ちた。

「——ッ、ゴホッゴホッ——」

両足に痛みが走り、そのまま崩れるように俺は棒へと凭れ掛かった。狭まった気道に無理矢理押し——。

「ゴホゴッ——」

突如、奇妙な圧迫感が腹部を襲った。その勢いは凄まじく、まるで棒のような硬い物で勢い良く突かれた感じだ。

事前に構えてなどいない俺は、その衝撃に耐えきれず、喉、口を通し咳と共に胃の中の物を吐き出した。焼け付くようにジワジワと痛む喉と腹部に、止みかけていた涙が溢れ出す。

「ゲホッ、ハアハアハア——」

胃の内容物が無くなり、嘔吐が嗚咽に変わったその時、
「ハアハアハア——」

ある音が俺を止めた。

それは頭の中で重く響いた音。まるで何かハマったような……。その音に自然と目が反応し、正面に顔を向けた。その瞬間、自然と目が見開き、あらゆる情報が無理矢理に飛び込んで来た。

穴闇銀制服紅瞳髪黒おん――。

「正解」

ほくそ笑むような冷たい女の声にまた何かハマったようなおとがきこ――。

初節：いつもの朝

「だああアッー!？」

天地を揺るがす程の大声を上げながら、俺は勢いよく体を起こした。

「はあ、はあ、はあ……」

激しい息遣いと活発に鼓動する心臓の音だけが、やかましく耳元で鳴り響く。

「はあ、はあ——ハッ!？」

ある事を思い出し、すぐさま額に手を当てた。しかし、何度触ってみても、当然穴など空けられたような形跡はなく、指をいくら確認した所で、そこには何も付いていなかった。

辺りを見回すと、左側には真つ白な壁が遮り、右側には狭いリビングが広がっていた。

リビングの真ん中には小さな白の机が置かれており、その奥には薄汚れた襖が見える。右の角には窮屈そうにテレビが居座り、横には白のカーテン。隠した窓から射し込む光を一層輝かせては、フロアリングの床に寝かせていた夏用の制服と皺だらけズボンの存在を引き立たせている。

この散らかった部屋は……、どこからどう見ても俺の部屋だ。

「はあ、はあ……ったく夢かよ……」

ふとため息をつき、俺は額から流れ落ちる汗を袖で拭いた。すでにしっとりとした冷たい袖に、べとつく水気が更に染み込んでくる。

「ああ……」

今度は口を半開きにし、ぼやけた視界で呆然と前の壁を見た。なんだろか……。やけに身体全体が妙に重たい……。

リングを丸呑みするぐらいの大きな欠伸を上げ、俺はそのままゆっくりとベッドから立ち上がり、天高く片手を伸ばした。天井に近付くにつれ、絞り出したような声が口から漏れる。

その後、首を左右に数回ひねり、未だハッキリとしない曇った思考と滲んだ視界のまま、重い足取りで洗面所に向かった。

洗面所に着くなり、俺はすぐさま鏡で自分の顔を確認した。

「あっちゃ……」

そこに映り出された顔は酷いものだった。

髪はボサボ——まあ、それはいつもの事だが……、表情が妙に疲れている感じがする……。まるで重労働をさせられた後のようだ。

「……よしッ！」

俺は気分をリセットする為に、蛇口の栓を開き、手に降り注いでくる冷水を勢いよく顔にぶつけた。

このままにして置くと、またあいつがやかましく言ってくるのは確定だからな……。

近くに掛けてあるタオルで顔を拭き、確認の為にもう一度鏡に目をやる。

映り出された顔は、どこか疲れたような表情をしている。……最早、その気でカバーするしかない。

「うっしッ！」

心と体に押し掛かっている重苦しい気を打ち払う為、全身に軽く意気込みを掛け、

「はあ……」

すぐに肩の力を落としては、再び口からこぼれ出すため息と共に鏡の前から離れた。

「——ん？」

リビングに戻るなり、机の上にある物にふと目に入った——時計だ。

規則正しく針を駆け巡らせるそれは、アナログ式の小気味良い音を鳴らしながら、頭に付けられた二つのベルを鳴動させるその時を、今か今かと待ち望んでいた。

……後一時間ぐらい。俺はベッドの上に腰を下ろし、時計の横に置いてあるテレビのリモコンを手を取った。

本当はもう一度寝たい。だが残念な事に、決められた時間に起きれる程、俺にはそんな自信も器量もない。だから、もし寝てしまつたら最後……結末は言わずとも分かっている話だ。

いつもと変わらない動作で、リモコンのボタンを押し、テレビを点ける。同時に聞こえる人の声、暗闇の画面から映り出されたのは一人の女性だった。

凜とした表情で真つ直ぐと背筋を伸ばし、透き通つた声と滑らかな弁舌で、手元に置かれてある原稿を慣れた手付きで次々と読み上げている。

俺は再び時計に目をやり時間を確認した。――まだ五分しか進んでいな……。

突然、虫が鳴いた。その音に思考を遮られ、溜め息を吐きながら、俺はベッドに倒れた。

しばらく腹部に手を当て無心になるも、虫は鳴き続ける。

その猛攻に耐えきれず、ベッドから起き上がるなり、糧となる物を探しに台所を目指した。

数歩足を進める、と同時にテレビからある一つの甲高い音が部屋中に向かって鳴り響く。

「えっ？」

その音に思わず立ち止まり、そして――。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

公園に備え付けられたアーチ型の車止めを過ぎた辺りで俺は一度立ち止まり、両手で両膝を押さえた。額からはポタポタと汗が滲み出し、地面に奇妙な斑点を付けては、すぐに姿を消していく。

ま、まさか、ここまで体力が落ちていたとはな……。

ひとまず肺に一呼吸空気を押し入れ、右手で額から滴り落ちる汗を拭い、振り返った。

視界に、先ほど通り過ぎた車止めと、誰もいない森林公園に一人寂しく佇む時計が目に入る。その時計の針を目にした瞬間、俺は心

は安堵に浸り、大きなため息が口から溢れ出た。……どうやら、間に合ったようだ。

家の中で時計を見てから最後、ここに着くまでに数十分は掛かると見込んでいたのだが……。今俺の目に映っている時計は、まだ数分だけしか足を進めていなかった。破竹の勢いで走って来た甲斐があったものだ。しかし、それと引き替えに俺は、余り迎えたくない現実を知る事になった。

——数百メートル。たかが、数百メートルだ。たったそれだけの距離を走っただけで、俺の肺は大量の酸素を要求してきたのだ。それに釣られたのか、静かに巡回していたはずの血液までもが今や一変し、体中が火照っている。

どうしたんだ……。以前なら、これぐらい走った所で息切れなどしなかった。ここまで衰えてしまった原因は何だ……。？

——常日頃、運動をしていなかったから？

——それとも、体育の授業をサボっていたから？

——単に、いつもより鞆が重いから？

——歳……。か？

『衰えの原因は何か？』を題目に、過去へと振り返ると、当てはまりそうな節が次から次へと浮かび上がり、正直——きりが無い。

俺は自問自答の論弁会を一時閉会させ、数回両腕を大きく広げては深呼吸を繰り返し、体を落ち着かせ、再び時計に目をやった。……針はそれほど足を進めていない。

まだ……。大丈夫だな。このまま走って学校に行ってもいいが、今の時間帯なら歩いても余裕で間に合う。それに、体を休ませる為にも少し歩いた方がいいだろうな。

最後に俺は、肺一杯に風邪を吸い込み、惜しむようにゆっくりと吐き出した後、歩き出した。

公園を抜けた先、住宅地の真ん中にある丘の上に俺の高校はある。

『天渡三枝高等学校』

天渡市の中でも、二番目に大きな高校だ。県内では、一、二を争

う程の人気で、毎年数多くの入学希望者が殺到する。その理由としては、俺の知る限り二つある。

まず一つ目は、誰もが心を奪われる絶景。事実、この高校に入学してくる半分の生徒が、その絶景に魅せられ入学届けを出している。しかし、この近辺にはそう言た絶景だと呼べるような場所など無く、校舎の窓から見える景色も瓦屋根ばかりと味気ないもの。それじゃ、この高校に入学してくる生徒達は、一体何処を見て魅せられたのか？ その答えは、ある一つの文に書かれていた。

『天渡分かつ丘陵の獄、迫りし虚空仰望ば色発つ高天原』書名、風我遊楽蝶。

ある作家が全国を自由気ままに放浪し、道中、点在する絶景ポイントに立ち寄っては、その場所の風景などを言葉で書き記した物だ。手書き……なのだろう。埃により黒く薄汚れた表紙には、汚いじ……いや、草書で題字が書かれ、その周り――表と裏には目立つたような彩色などされず無地のままだ。唯一あるとすれば、表紙の左側中央に開けられた二つの穴から飛び出す糸が、途中で交じり合い、一匹の黒い蝶となつてはその本を飾り立てている。

何一つ見栄えのない書物。偶然とも言えるのだろうか。この書物と出会ったキツカケは、ほんのちよつとした事からだった。

ある日の事……と、俺と書物との感動的な出会い話をしたい所なのだが、少々長くなるので今は止めて話を戻す。

『天渡分かつ丘陵の獄、迫りし虚空仰望ば色発つ高天原』

一見何を言っているのか分からない文だが、聞いた先生の解説によると、単語一つ一つにはその場所を示す意味が込められている。い。

まずは天渡分かつ丘陵の獄。「天渡分かつ」とは、この街を二つに分けた、と言う意味があり、「丘陵の獄」は学校を含めた丘を指している事になるらしい。

次に続く「迫りし虚空仰望ば」、虚空は大空を意味するが、学校外のどこを見上げててもそれが当てはまるので、その前の迫りしが鍵

となり、空が最も近付く場所と言えば屋上となる。

で最後の「色発つ高天原」、色は『いろ』と読まず、『しき』と読むらしく、更にはもう一つそこには『四季』という意味も込められており、そして「高天原」は神々が住む天上界を指すと。

つまり簡単に言えば、「天渡三枝の学校屋上が素晴らしい！」となる。これが、人気の理由その一。

……まあ、神々が住む天上界とは少し言い過ぎだとは思うが、あの景色を始めて見たなら、そう感じても納得出来ない話ではないと思う。

そして、最後の理由。それは、この天渡三枝高自身に存在する。

先ほども言ったが、大きさでは県内二位を誇る天渡三枝高は、住宅地の真ん中にある丘の上に堂々と存在し、その身に見当たった土地を持っている。

そのおかげで、校舎の周りには大型のプールや二階建ての大きな体育館、更には何もなかった広だけの運動場など、置けるだけの施設が暑苦しいほどに敷き詰められている。この十分過ぎる設備を理由に生徒達が集まる。これが二つ目の理由になる。

ちなみに俺の場合は、最初にその事は聞かず入ったので誰よりも驚いていたが、ある話を聞いて更に驚かされる事になった。

今の状態でも、公立校としては十分過ぎる設備を持っていると言うのに、俺の耳に届いた差出人不明の風の便りによると、毎年新入生確保の為に、学校側は常日頃と、設備拡張を計画中らしいのだ。もはや、取り憑かれていると言っても良い。

だが、もしこの話が本当の事で、今も計画案が出されているとしても、実際の実施は数百年ぐらい先の話だと俺は思う。事実、公表こそしてはいないのだが、学校のサイフは現在炎上中なのである。何故なら、その事を実証するかのように、学校の至る所では様々な問題が起きていた。

食堂での値上がりや、全体行事などがやたらシヨボくなったり、一番ひどい時は自販機すら三十円増加と、新入生にも学校側の現状

を非常に分かりやすく伝える政策行為である。……では、何故これ以上こだわる必要があるか？ その理由は簡単だった。天渡三枝高から向かって数キロ右側、街を囲む山の一部となるその場所にその答えはある。

全校生徒——約七百人。この街でどの……、いや県内のどの学校よりも、圧倒的な土地面積を所持する最大の高校『私立梶高等学校』その土地の広さは山一つ分とも言われている。しかしこの高校、凄い所はそれだけでは無かった。

まるでどこかの豪華宮殿のような広い中庭に、学校の一部と化する裏山から舞い落ちる季節。学校内には大型の食堂と寮。そして、驚きの授業料はタダに卒業生就職率、百パーセント！……と、まさにこれからの受験生にとっては夢のような場所である。そんな樂園を、当然受験生達がただ茫然と傍観している訳もなく、毎年数多くの入学希望者が現れる。

その事に警戒した天渡三枝の校長は、新入生の目を向かせる為に設備の増加で気を惹かそうとしているのだ。

この流れを知れば、天渡三枝高の設備拡大、焦る気持ちも分かる気はするのだが……、俺にはそれほど気にする必要はないのでは？ と思う節がある。——実は、梶高等学校からも少し奇妙な風の便りが届いていた。

夜な夜な外出する梶高の生徒の目撃例。学校内に鳴り響く謎の爆発音。そして、黒服を身にまとった不気味な男達……とそんな話である。

確かに少し大げさで嘘っぽい話だが、実際に見た人が何人か居たらしく、その信憑性は高い。のだが、これから入る新入生達は、そんな噂など元々興味がないのか、その数が止まる気配はない。それじゃ、なぜ気にする必要がないのか？ その理由は、もう一つの風の便りにある。

奇妙な噂が絶えない梶高等学校。その中に、一つだけ実証されている噂がある。それは……。『入試試験に合格した者は誰もいない』

過去にどんな成績、登校日数であっても、入試試験を受ける事が出来る柊高。そのせいあってか、入学希望者第一希望の殆どが柊高になる。

だが、入試試験のハードルが高いのだろう。柊高の受験者達のほとんどが合格する事はなく、やむなく第二希望の天渡三枝高に雪崩れ込む現象が恒例となっていた。

これにより、天渡三枝高は毎年大勢の新生入生を確保が出来る事になっっている為、設備拡張をせずとも大丈夫なはずなのだが……、それでも警戒し続けているのには、何か訳があるのだろうか？

「ん？」

ふと耳元に、誰かが騒いでいる声が入ってきた。その声に釣られ顔を上げると、目の前にガラス張りの玄関が現れた。どうやら知らず知らずうち着いたようだ。

後ろではカサカサと落葉樹の葉が揺れ動き、俺の横を何十人もの生徒達が挨拶を掛け合いながら、ガラス張りの玄関へと姿を消していく。……この様子からして、何とか遅刻にはならずに済んだようだ。俺はその流れに乗るように前に足を進めた。

「龍麻君、おはよう！」

玄関に足を踏み掛けた時、後ろから名前を呼ばれた。すぐさま立ち止まり振り返ると、遠くから長い黒髪を大きく揺らし、こちらに向かつて走ってくる一人の女子生徒がいた。

「はあ、はあ、はあ……」

その女子生徒は俺の前に着くや否や膝に手を置き、長い髪を揺らしながら、何度も大きく息を繰り返した。

「どうしたんだ霧崎？ なにをそんなに急いでいるんだ？」

「は、ははっ……、いや、ちょっとね！」

そう言っつて霧崎は顔を上げ、頬から汗を流す笑顔で親指を立てた。この様子……、どうやらいつも、俺と同じ被害者みたいだな。

しばらく待っていると、霧崎は小さく深呼吸を始め、何事もなかったように微笑んできた。

「あれ？」

しかし、目があった瞬間、その微笑みは消え、今度は不思議そうな表情でまじまじと見出す。

「何だよ？ 俺の顔に何か付いているか？」

「い、いやね、龍麻君の顔、ちよつと元気ないかな」って

「……………」

——するどい。

今では恒例となっている、霧崎の『体調当て』が始まったのはつい最近の事ではなく、小学生の時からだった。

ある日の事、俺は風邪にかかり、医者から自宅安静を告げられ、籠城を余儀無くされた。

だが、当時はまだ子供。行動活発だったあの頃は、牢獄のような窮屈な部屋にジツとしていられる訳もなく、すぐに飽きては家から飛び出し、友達と外で走り回っていた。その中にはもちろん、霧崎の姿もあった。

しばらく走り回っていると、ふと霧崎が俺に近づいてきて、『やっぱり龍麻君、体悪いでしょ。顔色悪いからすぐに分かったよ。早く帰って寝なきゃダメだよ』と払われた。

それ以来、少しでも体調が悪い時に外に出ると、ギャーギャーと騒いで来る始末。それが嫌だから、今朝、冷水をかぶったのだが……やはり、無駄だったようだ。

「まあ、病気とかじゃないんだ。ただ……ちよつと変な夢を見てな」
「変な夢？」

右手で髪を掻き上げ、霧崎が詳しく聞きたそうな表情で俺を見てきた。このまま黙って話を逸らそうと思ったが、秘密にするほどの重要な話でもなく、それどころか話を無理に誤魔化すと後々厄介事になりかねない……。俺は教室に向かうまでの間に話す事にした。

「——ああ、場所は夜の公園……ほら、俺んちの近くにあるだろ。多分、そこだとは思うんだが……、まあ、その場所で一人座っていいさ。目の前に誰かがいるんだよ」

「へえー、誰か……それで？」

「それで、そいつは真っ赤な目をしていて、俺をじっと見ていたんだよ」

「……その後は？」

「おしまい」

「へえ？」

霧崎が啞然としたような表情をした。

「おしまい。この後に目が覚めてこの有り様だ」

「そ、そうか……、確かに何だか少し気味が悪いね。ははっ……」

「ああ、そうだよな……」

霧崎が啞然とするのも無理はない。話を聞いただけなら、それは何のオチもない、ただ見た夢の話だからだ。しかし、それを見た俺には奇妙な感覚が残っていた。

夢つてのは、大抵は目が覚めると、その内容の殆どを忘れているものが多く、例えばそれが印象強く覚えていたとしても、ぼんやりとして実感は無く、曖昧なもの。だが、今回はかりは違っていた。霧崎には途中までしか話していないが、俺はしっかりと覚えている。

あの時の感覚を……。

——薄暗く息もしない静寂。

——目に焼き付いた奇妙な光。

——腹部に残るあの痛み。

——何かがハマったような大きな音。

——声。

ほんと、気味が悪い……。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「——っ!？」

突然横から聞こえた声に、俺はふと我に返った。声のした方に振り向くと、そこには眉をひそめ、濁りのない黒き瞳で俺の顔を見つめる霧崎がいた。

——やばいな……、少し気にし過ぎだな……。

「……ああ、大丈夫だ。それより、早く教室入らないと遅刻だぞ」
俺は頭の中にこびり付いている夢を振り払い、上履きに履き替え、
それぞれの教室へと向かう生徒達に紛れ込んだ。後ろから響く女子
生徒の声を後にして――。

一節：いつもの席

「ん？」

教室に入るなり、自然とある光景が目映った。窓側の一番奥から二番目の席、そこに一人の男が座っているのだ。

黒の短髪、机に立てた右肘の手のひらに頬を当て、だらしなく口を開けて前を見つめている。男の左側にある少しだけ開かれた窓からは、微かに風が流れ込み、ゆらゆらと体を揺すっていた。

あそこは——俺の席だ。急ぐ事なく俺は、いつも通りの足取りで男が座っている席まで移動し、目の前に立ちふさがった。

……どうやら、完全に向こうの世界に行ってるみたいだな。

男は、俺の存在になど気付かず、先ほどと変わりなく口を開ききったままだ。

「はあ………つたく、おい……、おい！」

「……ああ………うん？」

男の左肩を掴み、前後に大きく何度も揺らしては、元の世界にへと呼び戻す。

「おい！ 起きろ！」

「ん？ ……ああ………起きてるよ………」

「——つたく」

その言葉に俺は、掴んでいた手を離し、しばらく様子を見守った。男は机に立てた右肘を微動だに動かす事はなく、窓の隙間から吹き込む風に揺すられ続けている。

その動きを数秒見続けた俺は、再び男の左肩を静かに掴み、「やつぱ、寝てんじゃねえーかよッ！」

激しく体を揺すった。

男の体は先ほどよりも激しく前後に揺れ動き、右手に押し付けていた頬の肉が縦横無尽にうねり動く。

「……んう………おきッ！！？」

突然、右手から頬がずれ落ち、支えを失った顔が机に向かって急速に落ち始めた。目を見開かせた男は、激突ギリギリの所で顔を止め、何かを探すように今度は顔を上げ、忙しく周りを見回し始める。数回首を左右に振った後、眠気眼の男と目が合う。

「……………」

「…………？　おい、大丈夫…………」

「無理」

そう一言いい残し、机に置いた両腕を頬を付けては、再び眠りにつき始めた。

「なっ！？　何が無理なんだ！　おい！　おいッ！」

「…………あア、…………るっせな」

ふてくされた様な小声を呟きながら男はゆっくりと体を起こし、椅子にもたれた。喉から絞りでる声に合わせ、伸ばした両腕が小刻みに震えている。

「っんん〜！！　…………　つと、へへっ、遅かったじゃないか」

「…………　ったく、色々あつてな」

「色々？　…………　なるほどね」

何を納得したのか。右手で顎をさすり、男が笑みを浮かべる。

「な、なんだよ？！」

「いや、何でもないぜ、…………　色々か、…………　へえ〜」

「気持ち悪い奴だな。…………　って、おい、それより早くそこをどけ！」

その言葉に男は、ハイハイと軽く返事し、椅子から立ち上がった。机に鞆を置き、すぐさま空いた椅子にへと腰掛ける。…………　生温い。

「まあ、何はともあれ無事に着いて良かったな」

男はへへっとなで鼻で軽く笑いながら、今度は俺の前にある席に腰掛ける。

「おいおい、そこもお前の席じゃないだろ」

「いいの　いいの。邪魔なら潔く退くから」

「…………　ったく、それより何の用だ？　何か用事があるんだろ？」

「おっ？！　流石は我が友！　よく分かったな」

「当たり前だ。お前が俺の席に座っている時は『必ず何か頼みごとがある』って、合図になってんだからな」

「そうなのか？ それじゃ、内容を聞かずとも、友情熱き龍麻君の事だから、もちろんオツケーを出してくれるよな」

「はあ？ 何言っているんだ。俺がいつから友情熱き男になったんだよ。一応話を聞くだけだ」

「ええー、ひど……おっ！ 麻衣ちゃん、おはよー！」

話の途中、突然男が横を向き、名前を呼んでは大きく手を振り始めた。それに釣られ振り向いた先、そこには霧崎がいた。

「おはよ、僚君」

霧崎が小さく頷き、廊下側の一番前にある席に腰掛ける。

俺が前に向き直すと、僚と呼ばれた男は未だに霧崎を見続けていた。

「はあ……、ほら、言わないのなら、早く自分の席に着け」

「ん？ まあ、今から言うから、そんな事言っなよ」

軽く鼻で笑いながら、僚が体を戻す。

「時に龍麻、お前、怖いモノのとかある？」

「怖いモノ？ ——これと言っていないな」

その返答に納得出来ないのか、僚は小首を傾げた。

「ふむ、おかしいな……、私のスーパーアイによる的確な分析結果では、君の怖いモノは、天渡三枝の一年三組廊下側左端の席にいる子だと出ているのだが……」

手で顎をさすり、まるで、どこかの教授みたいな口調で僚が話す。

「……それはきつと、貴方の気のせいですよ。いや、絶対に気のせいです。っつか帰れ！」

「……」

その返答に無言のまま、細目で俺を見つめてきた。

「……っすうー、あれ、歳をとりすぎたのか、君の声に一瞬だけ殺意が隠っていたような、まあ、気のせいだな。はっははっ」

「ええ、それも気のせい。帰れ、帰れ」

「……、——まあ、いいだろ。それより最後の質問だ」

そう言つて僚が人差し指を立て、俺の目の前で左右小刻みに振つてきた。

「最後の質問？ 早いな」

「ああ、もうネタがない。ええ〜つとだな、龍麻君、今朝、君は二ユースとか見てきたかね？」

「ああ……、じっくりとは……見てないな。間一髪で助けてはくれたけど」

「……そうか」

また顎を手でさすり、何を納得したのか、今度は小さく頷いた。

「それで、今朝の二ユースに何が？ ああ、まさか教授であろうの方が下着泥棒で捕まり、補導されたとか？」

「——なっ！？ た、龍麻君！ 私を何だと思っているんだね！ 私はそんな変態ではないよ！」

ガタンと鳴る音と同時に、僚の顔が至近距離に迫る。

「ハ、ハア〜、スンマセン」

「……ったく、分かればいいのだよ、分かれば。大体、私は盗むより覗く方が好きなのだよ。盗んで捕まるぐらいなら、覗いて捕まりたいよ。……あつ、そういうば一回覗きに……」

一人ぶつぶつと呟きながら、僚が元の席に戻る。

「……へえ〜、何か色々と大変ですね。それじゃ、話しは以上でおしまいですね。さよならですね」

「……る気があつ……、とっ待ちたまえ！」

突然俺の腕を掴み、僚がまた至近距離まで顔を近づけてきた。

「なぜ君はそうやって人を避けていくのかね。それだから君という人間は……」

「ああ〜、暑苦しいから顔近づけるな！ それにもう普通に話せ、普通に！」

「……まあ、今ので大体、俺の頼みごとは分かっただろ？」
「覗きか？」

「違うだろ！ 今朝のニュースの話だ！ …… ってか、お前本当に知らないのか？」

何をそんなに驚くか。突然鳩が豆鉄砲を食らったよう表情で俺を見てきた。

「知るわけないだろ、今朝は遅刻しかけてゆつくりとテレビなんて見てないんだからよ」

「ああ、そうなのか。だから遅かったのか……。実はな、今朝、この近所で殺人事件があったのよ」

僚が少しだけ目を細める。

「殺人事件？」

「ああ、場所はこの近くの路地裏らしい。ほら、お前が通学の時に通る公園があるだろ？ あの辺りだ」

「…… ああ、なるほど」

頭の中に今朝通ってきた公園が映り出される。確かにあの辺りは住宅密集地なので、路地などが多い。夕方は住宅から漏れる明かりにより道は明るいのだが、夜になると街灯が少ないせい、一気に薄暗くなり、人の気も全くなりなくなる。

更にあの公園はその住宅密集地の真ん中に在りながらも、土地は結構広く、森林のように数多くの木々達が生え並んでいる為、変質者などが出没するのはさほど珍しくもない話なのだが……。まさか、その近くで殺人事件があったとは驚きだ。

「しかし、殺人事件なんて珍しいな」

「だろ。変人は出るが、殺人鬼はな……。今朝のニュースでやってたから、見に行つてると思つたんだがな……」

その言葉に俺は何も答えなかった。その事を知れば人は興味本意で行きたくもなるだろうが、俺は行かない。そういうのはあまり好きじゃないからな。

「まあ知らないなら仕方ないよな」

そう言いながら、残念そうに僚が深くため息をついた。

「…… んで、その事件。犯人は？」

「いや、それがまだ。犯人は見つかってないらしいんだよ。それにその殺人、被害者は普通の女性なんだが、殺され方が尋常じゃなかったんだってよ」

僚が少しだけ声のトーンを落す。

「ニユースでは被害者の女性は刃物により腹部を刺されたって言うてるけどよ。実際に見た奴らからの証言では、かなり酷かったって話よ」

更に声のトーンを落とす。

「嘘かどうかは俺にも分からねえーが、まず、体がバラバラの状態で見えられたんだってよ」

「バラバラ……」

頭の中にイメージ映像が造られていく。俺は急いで頭を左右に数回振り、無理矢理頭の中から消し去った。

「ああ、んでさあ、さっきも言ったが、警察は腹部を刺されたって言うてるけどよ。実は、腹部は刺されたんじゃないって、何か鎌みたいな物で肩から斜めに勢いよくぶった斬ったって感じなんだってよ」

「ぶった斬る……」

頭の中にイメージ映像が造られていく——いかん、いかん。

「後、関係はないんだが、斬られて放置された体はカラスとかが啄んでいて、見つけた時には原形をとどめてなかったらしい」

「啄んで……」

頭の中にイメージ映像が造られていく。うつ……、関係ないなら言うなよ……。

「それと、これは新情報なんだが……」

僚が顔を近づけ、俺の耳元で小さく呟く。

「実は、バラバラにされた死体、未だに——頭部の方だけが発見されてないらしいぜ」

そう小さく呟いた後、小さくニヤツと笑みを浮かべながら頭を戻した。

「頭部だけ……」

頭の中にイメージ映像が造られていく。……もう許してくれ。

「まあ、これだけ奇妙だと、警察側も気味悪がってな。周りの住人にも恐怖を煽らない為に、内容を少し変更したって話らしい」

両手をチョキにし、僚が胸元でハサミのように指を動かした。

「……そうか、——んで、結局、お前は俺に何を頼みたいんだ？」

このままだと、お前の頼み事は、この事件の犯人探しか被害者の頭探しになるぞ」

「それは、困る。俺にはそんな趣味はないし、暇もない。それに、俺は既に犯人の目星をつけているんだ」

「ほお、誰だ？ 一応聞いてやる」

「ふふつ、聞いて驚くなよ……。犯人はな——」

「……犯人は？」

「宇宙人だ」

その瞬間、俺の心が一瞬で凍りついた。それはまるで、真冬の湖に突き飛ばされたぐらいの寒さだった。しかも『宇宙人』と発言した後の僚の真顔が、冗談で言ってるのか、本気で言ってるのかが分からない所が更に寒さを引き立たせている。

「……あつ、そ。よかったね。お前は宇宙人に一回解剖された方がいいぞ。むしろされる」

「いや、だってお前、被害者バラバラになっているんだぞ？ ましてや、頭部がないんだぞ。絶対に宇宙人だ」

僚が何かを確信したような顔で、拳を空に掲げる。

「はいはい、ようございやしたね」

俺は呆れ、校庭を眺めた。

「さて、ここから本題に入る訳なのだが……」

「えらい長い前フリだな」

「さつき、俺の質問に龍麻は『怖いモノはない』と答えたよな」

「ああ、答えたよ」

「実はな。この前、ちいっとばかり大変な用事があった、掃除時間の時に持ち場外していて掃除が出来なかった訳よ」

「サボっただけだろ」

「まあ、そんな所だな」

右手軽く広げ、僚が小さくため息を吐いた。

「んでさあ、まあ結局、掃除してないの見つかっちまってよ。今し方『お前、自分の持ち場掃除しなかつたろ?』って言われ——」

「あつ、分かつてきたぞ。徐々にお前の考えが読めてきた。俺にその罰を一緒にさせる気だな」

「ビンゴー!!」

当てられたのがそんなに嬉しかったのか。僚が目の前でパチンと指を鳴らした。

「……あのな、なんで無関係の俺が、一緒に罰を受けなきゃならないんだ」

「いや、俺だつて一人でやれるならやってるって」

「んじゃ、一人でやれよ。どうせ、その場所をもう一度掃除とかだる?」

「さすが龍麻! そこまで読んでいたか。しかし、チツチツチツ」

目の前に立てられた人差し指が、口から鳴るリズムに合わせて、左右に揺れる。

「甘い、甘いな龍麻君、問題はその場所、場所何だよ」

「——トイレだっけ?」

「いや」

「んじゃ、ど……」

「用具室だ」

突然放たれた言葉に、

「——へっ?」

俺の思考が一瞬止まった。

何かの聞き間違いだろう。俺はその言葉確かなモノにすべく、もう一度聞いた。

「ば、場所はど……」

「用具室」

すかさず僚がこれ以上にならない満面の笑みで答える。

「は、ははっ……、なるほど、用具室ね」

二回目の言葉に、やっと理解した俺は、

「ふざけるなッ！　ようぐし——用具室だと！？　『要塞』じゃ

ねえーか！」

声を上げた。

「用具室。別名『難攻不落の要塞』天渡三枝高等学校南部に位置する体育館内部の西側に備え付けられた一室。部屋の構造図は平面幾何学において四辺、四角が全て等しく正……」

どこかの音声案内のように、僚が坦々とした早口で語り出す。

「……い込みすぎて使われなくなった可哀想な数々の用具達が眠り、我々一年、人数数十人掛かりでも必ず一、二時間以上は食われるとさ……」

「だあッー！！　そんな説明しなくても分かってるんだよ！　そんな話じゃない！　あの場所がヤバい事ぐらいは良く知っているだろ！？」

「当然。だからまあ——って訳だ。俺達だけで頑張ろうぜ」

満面の笑みと共に、俺の目の前に突き立てられた親指が意気揚々と威勢を放つ。

「俺達つて……、やはり俺も！？　ふざけんな！　あんな所二人でやっていたら半日以上はかかるわッ！」

「ふざけてないわッ！　俺一人でやったら半年はかかるわ！　なあ、頼むよ。二人でやったら、夜ま……、いやいや、夕方までには終わるからさあ」

両手を合わせ、僚がへこへこと頭を下げた。

「絶対に嫌だ。何で無実の俺までお前の罰を受けなきゃならんのだ。やるなら一人でやれ」

「ええー、そんなこと言うなよー、俺一人だと、帰れるの夜になるじやんかよ。そしたら、帰り道絶対に狙われるじゃん、宇宙人に。龍麻君には怖いモノないんだろ？　襲われた時、なあ頼むよ」

「何が襲われるだ……。あのな宇宙人なんている訳ないし、もし居たとしても、お前みたいなのを連れて帰った宇宙人さんが困るだけなんだよ」

「……」

先ほどまでうるさく吠えていた男から、どことなく冷たい目線を感じる。

「な、なんだよ」

「……あつ、そうですか。あつ、そんな事を言っちゃうんですか」

僚が静かに椅子から立ち上がり、教室の中心へと向きを変えた。

「なら、仕方ないな……。俺も言いたくはなかったが、言わざる終えないな」

「何を言っただよ」

「アレだよ。アレ」

アレって……。何だ？ その言葉が妙に引っかけた。

僚との付き合いは長く、他の誰よりもお互いの事を知ってる。そんな中で俺は、自分の弱みなど一度も見せた事がなく、ましてや俺から言うなど絶対に有り得ない。

「あ、あれって何だよ」

「ん？ 覚えてないのか、アレだよ。アレ」

背をこちらに向けたまま、僚がへへと小さく肩を揺らす。……聞いた俺が馬鹿だった。今やどんなに問いただそうとも、こいつから返ってくる言葉はただ一つ。『アレ』その一言しかないだろ。

まあ、アレやコレやと言われ所で、今の俺には全く見覚えがないし、ハッキリと言わない所を見ると、ただのはったりなのは間違いないと思うのだが……。

「さて、報告してきますか」

「——報告？」

その言葉と共に、僚がゆらゆらと何かに導かれるように歩き出した。一体誰に何を報告しに行く……なっ……。

僚の行き着く場所。その到着地点を悟った瞬間、啞然とした。

相変わらずのスペースで、僚が少しずつ廊下側の席にへと向かう。
あの席には……！

「つちよ！？ ちよつと待て！！」

俺は急ぎ立ち上がり、僚の右肩を掴んだ。……霧崎の事だ。例え他人から聞けば有り得なく馬鹿げた話でも、アイツの耳にはかなり重大な真実として聞こえてしまう。アイツに嘘はないからな。

掴んだ右肩の先、僚が不気味にほくそ笑んだ顔を少しだけ覗かせる。

「わ、分かったよ。手伝えば良いんだろ。手伝えば！！」

俺は渋々承諾した。これから待ち受ける出来事に後悔しながら……。

二節：悪夢

「ハア」

大きなため息と共に、俺達は正門を目指し歩いていった。後ろでは、苦痛の表情をした僚が何度も腰をさすっている。

授業が終わり、俺は約束通り僚の手伝いをした。当然ながら用具室の掃除は思っていた通り大変なモノだった。陸上、球技、弓道、柔道、など……、あらゆる種類の道具が埋め尽くし、蟻の一匹も容易には通さぬ様それ等は固められ、扉を開く俺達を待ち受けていた。

さて、どうしたものか……。用具室の扉を開けた後、俺は何もせず、その場で立ち尽くしていた。

ここでの掃除手順は簡単なものだ。中の道具を全て外に出し、床を掃いては拭き、また中に道具を入れ、元に戻す。実に簡単な工程。しかし、数が数なので、それが大変な事なのは見た瞬間に誰にでも悟れる。僚が俺にすがりついてきたのにも納得出来る話だ。俺だって一人でこの場所を掃除しろ、と言われたら、誰かに泣きつくと思う。

だから、わざわざ承諾してやったのに、現在その原因となった短髪の男が、一人陽気に俺の後ろでボールとじゃれあっている理由を俺は今、知りたい。

左右でざわめく落葉樹。まるでこの場所から俺達を追い出すように音を上げ、後ろから少し強めの風が背中を押す。

「——いつ……」

後ろからまた僚の声がした。

「……まだ、痛むのか？」

「当たり前だッ！」

「大げさな……、そんなに痛くはないだろ」

「ッざけんな！ 何が痛くはないだろ、だ！ 俺の大切な背骨ちゃん
が泣いてるわ！」

背中をさする度、僚は小さな悲痛を上げ、目に涙を浮かばせる。

「背筋が伸びて丁度良かったな」

「伸びるか！ 折れるわ！ バスケツボールだぞ！ バスケツツ
！ あんなくそデカい硬球を思いつきしぶつけやがって——ってて

……」

「天罰だよ。天罰。働かない者に対する天罰だ」

「ギヤアアアッー！！」

「おい、うるさいぞ。いちいち叫ぶな」

「いや、無理！ 絶対に無理！ 腰が無理！」

「これで終わりなんだ。さつさと済ませるぞ」

僚にそう言い聞かせ、両手に持った大型のボール入れの籠を強く
押した。一歩進む度、喧しい叫び声が体育館全体にこだまし続けて
いたのは、言うまでもない。

用具室掃除開始から数時間後、俺達は宿直室に居るお爺さんに鍵
を渡し、学校を後にした。

外に出て空を見上げると、そこには満面の黒が広がっていた。

結局終わったのは夜だった……。

「——ツてて……、んじゃ、またな」

正門を過ぎた辺りで、僚が立ち止まった。

「ん？ ああ、そっちの道だったな。——それじゃな。今日はおか
げでよかっただ」

「はあ？ 何言ってるんだよ。俺の方が重傷でくたただぜ。……ま
あ、今日一日、ご苦労さんな。腰は恨むが、掃除はほんと助かった
ぜ、サンキューな」

片手を振り、僚が反対方向へと歩き出す。

「おつと……」

闇に消え行く中、突然僚が立ち止まった。

「龍麻」

「ん？ 何だ？」

「今朝話していた、殺人事件の話なんだけどな……」

「あつ、はいはい、宇宙人さんに気をつけたらいいんだろ？ 分か
つたよ」

「ああそうだ……。——それとだな」

僚がゆつくりと振り、

「実は、バラバラにされた被害者の女性。襲われた時間帯なんだが、
どうやら生物が闇に溶け込む時間だったらしいんだ……そうだな」
空を見上げ、不気味に笑い出した。

「丁度、今ぐらいかな。へっ、へへへっ……」

「……………」

「へへっ、まあ、そういう訳だからよ。きいーつけて帰りなよ。あ
つ、龍麻には怖いモノなかったんだよな。それなら、問題ねえーよ
な」

高笑いを残しながら、僚が姿消す。最後までそれを見送っていた
俺は、

「ふん、アホらしい」

そう小さく言い放ち、歩き出した。

「……………ぬおッ!？」

横から響く犬の鳴き声。その音が住宅地に喧しく響き渡る。

「……………つだよ、——わッ!」

俺は仕返しにと犬を威嚇し、急ぎその場を通り過ぎた。俺の威嚇
が効いたのだろう。鳴き声は強さを増し、背中に向かって更に喧し
く鳴き続けていた。

「つたく……、なんだ最近の犬は……、ハア……」

俺は大きくため息を吐くも、少しばかり安堵に浸った。

実は学校を出てからここに来るまでの間、生き物と呼べる生き物に、出会う事が一度も無かった。……まあ、左右の窓からは光が出ていたので、居ないと言う事ではないのだが、外の世界は静寂で包まれ、まるで『地球上から全ての生物が消えてしまった』と思うぐらい、気配が感じられなかった。これなら、何が起きても誰も気付かないだろうな……。何が起きても……。

——いやいや、有り得ないな。科学一つで何もかもが証明されるこの時代。宇宙人などいるわけがない。

大体、宇宙人を見たと言う目撃者達は、多分……あれだ、銀色の全身タイツを着た変質者を宇宙人と勘違いしたのだろう。うん、絶対にそうだ、間違いな……。少し、寒くなってきたな、早く帰って風呂にでも入……。

「ん？」

突然、耳に奇妙な音が入ってきた。辺りを見回したが、チカチカと点灯を繰り返す街灯以外に音の原因となるものは見られない。気のせ……。まただ、また小さく聞こえた。

目を瞑り、音に耳を傾ける。音はさつきよりも大きく聞こえる。

……右から？

音のする方に振り向くと、そこには路地へと入り込む小さな口が開かれていた。奥は真っ暗で何も見えない。俺はもう一度耳を向けた。……聞こえる。微かだが……。

路地は相変わらず暗く、そこを見続けていると、まるで異次元世界に行く為の入り口のようにも見えてくる。

俺は一瞬ためらうも、覚悟を決め路地へと足を進めた。

乱雑に置かれた古びた街灯の薄明かりを頼りに、足を進めて行く。一歩進む度、あの音が徐々に大きくなる。まるで、水で浸した小麦粉を何度も練っては何かを作っているような音が……。

しばらく歩くと、遂にその音が直に聞こえてきた。普段ではあまり聞き慣れない音を前に、俺は少し後悔していた。

そもそも、この路地に入った理由としては、音の原因を確かめる為の興味本位だけで、事件の事はついでみたいな感じでしかなかった。

しかし、この音を間近にした今、頭の中では僚の言った言葉が強く思い出されるように何度も浮かび上がっている。

『まず、体がバラバラの状態で見えたらだつてよ』

——ふん、それがどうした。

暗闇に響く足音を、あの音が掻き消して行く。

『何か鎌みたいなので肩から斜めに勢いよくぶった斬ったって感じなんだつてよ』

——だから、なんだつてんだよ。

目の前に壁が見えた。左に曲がり、更に進む。

『体をカラスが啄んだような後が無数に残っていて、滅茶苦茶になつてたらしいぞ』

——もし、誰かが殺されかけているかも知れ——。俺は足を止めた。目の前であの音が鳴り響いていた。

右側に置かれた一つの薄暗い街灯が、その場所を照らしていた。

俺は目を凝らして、奥を見つめる。ハッキリとは見えないが、暗闇が微かに動いている。……どうやら、誰かがいるようだ。一体誰だろう？

——この近くに住んでいる人か。

——それとも変質者か。

——やはり殺人事件の犯人か。

……何にしろ。早く止めたい。

「す、すみません……」

俺は暗闇に向かって呼び掛けた。呼び掛けと同時に、あの音は止み、暗闇にいた影がゆっくりと立ち上がり、こちらに向かって歩いてきた。その足取りは重く、まるで焦らすように遅い。それに、何だろうかこの音。そいつが近づいてくる度、水滴が地面に落ちるような音が響いていた。

しばらく待つと、暗闇にいた奴が街灯の手前で立ち止まった。辺りには、ゆつくりと水滴の音だけが聞こえ続けている。こいつ……なんだ……？

警戒しすぐには近寄らず、顔だけを覗こうと一歩前に進んだ。しかし影は深く、顔は隠れ——口元で何かが揺れている。何かをくわえているのだろうか？　それが揺らめく度、あの音が耳に響く。まますみ気持ち悪い奴だ……、早く警察に……。

ポケットから折りたたみ式の携帯を取り出し、キーを押す。その瞬間、

「——えっ？」
指が止まった。

視界に思わぬモノが映り出された。口にぶら下げているモノ、そこから棒みたいなのが地面に向かって真っ直ぐ伸びていたのだ。

その棒からは、ヒタヒタと雫が滴り落ち、照らされた地面に真紅の崩れたバラ模様を描いていた。

「えっ……、な、なんだよこれ……、グッ！？」

突然、鉄の匂いが鼻を刺激し、咄嗟に口を押さえた。この匂いは……。

今すぐにこの場を去ろうと、携帯をしまい振り返る、が、突然音が鳴り、動きが止められた。何の……音だ？

耳に残る音。それはまるで果実を地面に叩きつける様な。

俺はそれ以上動く事が出来ず、恐る恐るそれに目を向けた。その瞬間、目が奪われた。……頭の中に、またあの言葉が響く。

『実は』

——それは助けを求めるように、細い棒を真っ直ぐと伸ば——。
「あつ……、あつ、あああ……」

自然と声が出る。しかしそれは、一つの単語ではなく、ただ断続的に繰り返される言葉だけ。

『バラバラにされた死体』

——それはしなやかな曲線を失い、ただの醜い塊に成りは——。

「……はあ、はあ、はあうッ!？」

突然の吐き気に襲われひざまずいた。

『未だに』

——それは街灯の光により、更に輝きを増した長い黒色をなびかせる事はな——

「うつ……、ゲッ——」

耐えきれず、胃の中の物を地面にぶちまいた。臭いと喉の痛みにもむせかえる。

『頭部の方だけ見つかつてないらしぜ』

——それは何かを語りがたそうな悲痛の表情で……俺を見ていた。

「た……け……」

「げぼッげぼ——!!?」

目の前から聞こえる小さな声。

「ひつ、ひつ、ひつ!？」

俺は涙を拭いながら立ち上がり、その場から逃げ去った。

闇に体を溶け込ます時、後ろからまたあの声が聞こえた。それ酷く掠れた小さな声。まるで誰かが……呟いているような。それが誰の声なのかは分からない。襲われた人、襲った犯人？

右、左、前。疎らに散りばめられた唯一の道標を頼りに、何度も体を壁に擦り付けながら、速度を落とさず俺は走り続けた。

「はあ、はあ、はあ——」

もはや自分の辿って来た道など分からない。とにかく前に。

幾度目かの角を左に曲がった時、ふと目の前に一つの光が見えてきた。点滅を繰り返すあれは……。

「——っ!？」

突如、視界から光が消えた次の瞬間、

「ガアッ!」

体中に痛みが走った。

「くっ……、くそ……!」

痛む体を起こし、路地から出た後、迷う事なく右に曲がった。

この先に……、もうすぐ……、もうすぐで公園が……、公園さえ抜ければ――。

ポツポツと明かりの灯る住宅に挟まれながら、導かれるように伸びる道を走り続けていると、ふと目の前に、天光公園と掛かれた壁が見えてきた。俺は顔面から飛び込む勢いよいでアーチ型の車止めを飛び越え、公園の中に入った。

『天光公園』

この公園は、その名前が付けられた通り、太陽の日差しが公園全体に降り注ぎ、真冬でも暖かい。

そのおかげなのか、公園内には幾つもの大きな木々が生え並び、数多くの生き物がそこに集まっていた。昼間には近所の子供や母親達、散歩、ジョギングをする人など、活気満ちた人の声が公園内を包み、夜には虫達が絶え間なく鳴き続け、心休まるそんな場所なのだが……、今は何一つ音は聞こえない。

「はあはあ……」

公園の中央辺りで立ち止まり、一度振り返った。

……姿が見えない、追い掛けて来ていない……？　しばらく見続けていたが、やはり姿は見せない。……とにかく家に……。俺は再び走り始めた。

まだ姿を見せない事から安心したのか、走る途中、頭の中にあの時見た映像が浮かんできた。

地面に散った赤い血に滴が落ちる音、そして――首。あれは現実なのか？　あんな事……、本当に人間が……。

徐々に先ほどの光景を見た自分が疑問になり、もやもやとした感情が膨らんでいく。そんな折り、ふと視界にアーチ型の車止めが入った。

出口、あれを越えれ……何だ……？

一瞬、後ろから奇妙な音が聞こえてきた。まるで空気を震わせたよう……。

「――ッ！？」

突然の事に足が止まり、

「あ……ああ……」

俺はその場に座り込んだ。それは——落ちて来たのだ。

水風船を叩きつける様な音と共に目の前に現れ、落ちた衝撃で辺りに赤色を散らばせている。

その光景に勢いは殺がれ、尻餅をついた体がゆっくりと後退りを始めた。引き攣った声とズボンの擦れる音を鳴らせながら。

「タ……テ……」

「ひっ——！！？」

後ろから声が聞こえると同時、背中に何かが当たった。

「……テ……」

何度も聞いたかすれた声。今その声が、はつきりと俺の後ろから聞こえてきた。それはまるで、か細く震えた女性、もしくは呟く幼い子供の様な機械質な声で『タスケテ』と……。

見上げると、そこには俺を見下ろしている一つの黒い影がいた。

影の右腕は天高く伸ばされ、その先が光っている。

……まさかッ！？

それが何なのかを覚った瞬間、自然と目が瞑り、すかさず右腕を顔の前に出し庇った——同時、

「くッ！！」

右腕に痛みが走り、反射的に引いてはその場所を左手で押さえた。

そこから溢れ出す液体が指と指の間を掻い潜り抜け、妙な温もりだけを残しては、その事実を伝えてくる。

俺はもう一度顔を上げる間もなく、這うような形ですぐにその場を離れた。右腕の使えないぎこちない四つん這いから体勢を直し、走っては時たま地面に崩れ、再び立ち上がっては走る——その動作を繰り返しながら。

道を塞がれ、行き場を見失った俺が死に物狂いで辿り着いたのは一つの街灯だった。後ろに目をやり、アイツが来てない事を確認した後、街灯にもたれ掛かり、薄暗い明かりの中、俺は改めて自分の

右腕を目にした。

視界に映る青白い肌。そこには乱れた鮮やかな赤い線と、押されて出来た指紋の跡がくつきりと残されていた。幸いにも浅かったのか、腕から腕へと縦に一週する様に付けられた傷口は、今は乾き、あの臭いだけが鼻の辺りを漂っていた。

緊張と恐怖が入り混じった空気から一時的に解放された腕がジンジンと痛み出し、震え始める。俺はそっと握り締め、ふと空を見上げた。

目に映ったのは大きく広がる青い空、雲一つないその場所を満月が一人照らしている。

その視線に気付いた時、視界が徐々にぼやけ出し、頬に温かい液体が伝った。

「ひつすつ……な、なんなん……なんなんだよ……、一体……」

問い掛けた言葉に、誰も答えない。

「くツ……、ひつひつすつ、く……すつくそ、くそくそくそくそツ！」

どうしてこうなった？ そう振り返る事もなく、俺はただ単に悔しくなり、罵る言葉を誰にぶつける事もなく吐き続けた。顔を下に向けると、地面に水玉の模様が描かれて行く。

「……うう……すつ、はあ、はあはあは——」

罵る言葉が荒い呼吸へと姿を変えた時、ある物が目に入り、俺の呼吸が一時的に止まった。今、ここにいるのは一つの影だけ、そこに別の影が前から現れた。

この場所には俺以外の誰かは少なからずいるはず。散歩、ジョギング、決してアイツと俺だけではない。もし誰かが居たならば、その人に助けを求めれば——。

それは決して可能性がないと言えない事。ふと前に現れたその影が、俺を助けてくれる。そんな希望を抱いていた。——あの声を聞くまでは。

「うう……ああッー！！！」

俺は影に覆われた地面に顔を向けたまま叫んだ。逃げる事はなくただじっと動かず、いや、動けずに――。

恐怖？ 絶望？ 断念？ そんな感情じゃない。

痺れ？ 束縛？ 毒？ そうでもない。まるでその動作自体を忘れたかの様に、逃げる意思すらなくなっていた。熱の籠もる震えた腕を抱き締め、掠れた声をただ上げ続ける。

影は何もして来ない。しかし、頭の中ではある一つ映像が流れていた。

徐々に上げて行く右腕、天辺に着いた合図としてその先が光り、それが振り下りてくる。断片的なコマ送りの映像。その一連の動作が脳内で引つ切り無しに行われている。俺は待つしかなかった。その繰り返される最後の画面、最初に切り替わる為のあのシーンを――。

――破裂。

「――ひッ――！」

声が上がリ、体が自然と身構える。それは突然鳴り響いた。まるで何かが張り裂けた大きな音。その音の後、目の前で何かが倒れたような重たい音がした。恐る恐る顔を上げる。

蒼と黒が入り混じったぼやけた視界、軽く目を擦り、改めて見る。誰もいない……？ いや、視界の右側に黒い影が見える。俺は視線をそれに向けた。

……さっきの影だろうか。視界に入った影はぐったりと横たわったまま動……！？ あるものが目に入り俺は咄嗟に身構えた。

……数秒待つが、何も起きない。気のせいだったのか、一瞬、影が動いた様に見えたんだが……。改めて見ると影はぐったりと横たわったまままだ。一体何が……。

「……？」

ふと影から足元に向かって何かが流れて来ているのが分かった。顔を少し傾け、覗く様に足元を確認する。

――緑。真緑の液体が足元まで迫っていた。照らす明かりにより、

液体は宝石の様にキラキラと輝いている。これは……。

「蠅螂」

「……ッ！！？」

突然、左上から聞こえた声に、俺の頭が自然と振り向く。向いた先、俺は目を見開いた。そこには、一人の女が立っていた。

三節：蒼月の女

「動物界節足動物門昆虫綱カマキリ目」

そうさらいと言いながら、街灯の明かりに触れる事なく、女は俺の目の前を通り過ぎ、

「……科は……」

横たわる影に近付いては、その周りをぐるぐると歩き始めた。時たま蹴っては、何かを確かめている。

「カマキリ……か？」

何か分かったのだろうか。今度は立ち止まり、何かをぶつぶつと呟き出した。その光景をただ茫然と見——女と目が合う。俺の顔を見詰めながら、こちらに向かって歩いて来た。地面に敷き詰められた煉瓦を踏みつける冷たい足音が徐々に強さを増し、それが止んだ時には、俺の目の前にあの女が立ちふさがっていた。

街灯にはつきりと照らし出された姿。それを目にした俺は、再び驚かされた。

制服だ。ネクタイもリボンもない真っ白なワイシャツに紺のスカート。腰まで伸ばした空に浮かぶ月のような蒼白い髪を垂らし、凜とした表情に合ったその冷たい目で俺を静かに見下ろしていた。右手には銃。これが、さっきの空気が割れるような音の正体……。

静寂での瞳を交差させる中、女がスカートのポケットに右手を入れ、何かを取り出した。無言のまま、手慣れた手付きで筒状の黒い物を銃の先に取り付け、先に口を開く。

「……おま」

「——後ろッ!!」

第一声、俺は咄嗟に叫んだ。目にした物。女の後ろ、丁度肩から垂直にあの光が——。

その言葉を合図とするかの様に女の肩目掛け、光が降り落ちてきた。同時、女が左後ろに体を傾け、そのまま影に左足を蹴り込んだ。

鈍い音と共に影が吹き飛び、暗闇にへと消える。

すぐさま何かにぶつかった様な重たい音が暗闇から上がり、その音を確認した女が後を追うように歩き出し姿を消した。

誰も見えない反響するだけの足音をしばらく耳にした後、目の前に広がる暗闇から二度の僅かな閃光とくぐもった様な短い音が響いた。その閃光の狭間に見えた女の背中。瞬時の騒音から再び静寂がおとず――。

突然、あの閃光と沈む音が再び鳴り、今度は女の右側から遅れて何かが崩れた様な音が鳴った。

瞬間、今度は左、前、右と幾つもの閃光と時たま鈍い音が鳴り始め、俺の目で繰り広げられるその光景は、まるでカメラのフラッシュを連続で炊く様に、一瞬だけ瞬いては消えを繰り返していた。刹那に見せる女の姿は、しゃがんでは立ったりと、毎回異なっているが、ただ一つだけ変わってない所があった。――立ち位置だ。

先程から絶え間なく聞こえてくる鈍い音と煉瓦とのダンス。それらは暗闇のあらゆる所から聞こえてくるのだが、姿を晒すその時には、どんな形であれ、常にあの場所に立っている。

その光景を俺は、信じられなかった。確かに、聞いただけでは、それが何か？　と思う人も居ると思う。事実、俺自身も他人からそれを聞けばそう思う。

何故なら姿を晒すその瞬間にその場所に立ってればいいだけの事。単純に考えれば何も可笑しくない話なのだからだ。

しかし、今も目の前で繰り広げられている光景……、暗くてハッキリとは見えないが、繰り広げられているこの光景には、その単純な答えがしつくりと来るものではなかった。今の状況、一人対一人。じゃなく一人対――複数。ましてや、その複数がああ路地で出会った殺人鬼の集まり……。その中でたった一人、違う場所から同じ位置に戻るとしても――果たしてそんな事が出来るのか？

しばらくそれは続き、しばらくしてそれは止んだ。騒音から一転し、今度は足音だけが響く。あの女だろう。だが、それは最初に聞

いた音と大きく変わっていた。ぴちゃ、ぴちゃと、まるで地面に溜まった水を踏んでいるかのようなあの耳障りな音。更にその音は等間隔ではなく、一つ鳴れば数秒してまた一つと弱々しく感じる。

やはり、無傷とは……。耳障りの音から煉瓦を蹴る音にへと変わってから数歩、それは再び俺の前に立ち塞がった。

だらりと垂らした両腕からは少量ながらも絶え間なく血が滴り落ち続け、ゆらゆらと左右に体を揺らせる度にそれを足下に散らせている。そいつは何も言わずただ茫然と立ち尽くし、そして——跪いた。

目と鼻の先。座り込んだままの俺と同じ目線、そこには顔があった。周りを包む闇よりも深い黒色の瞳で、じっと見る俺の瞳を見返しある言葉を呟く。

「タスケテ……」

「……ッ!？」

その言葉に俺は我に返った。改めて目にする顔。それは、あの女ではなく、何より——人ですらなかった。

カマキリ。逆三角の頭に緑の表皮。突き出た二本の触角の横には、深い黒色の大きな複眼が、夜にも拘わらず、目を見開かせた俺の顔を映している。頻りに動かす口からは、女性とも子供とも取れる高音の機械質な声で、あの言葉を放っていた。

俺は目を奪われたまま、その言葉を耳にし続けていた。

「タスケテ……」

それは本当に人の様な、

「タスケテ……」

弱々しく力のない、

「タスケテ……」

傷付き今にも消えそうな人の声。

「タスケテ……」

縋る様に何度も何度も止む気配のなく呟かれる言葉。

「タスケテ……」

俺の左手は震えながらも自然とそいつに向かい差し伸べ、
「タスッ……」
着いた時には、

——そこには既に何も居なかった。

四節：説明不足

その声を止ましたのは、一つのくぐもった銃声だった。俺の手が届く前にその音は鳴り、目の前に居た奴の頭を撃ち抜いた。声はすぐに止み、今まで鳴いてた奴はぐったりと下方を向いたまま跪き、置物と化す。

直後、

「何言っているのか——分からないのよ」

置物の横に居た女がそう冷たい声で言い放ちながら、こめかみの辺りから液体を垂らす物を蹴り倒した。支えのない置物は地面に倒れ、徐々に煉瓦を緑で染めていく。

「……はあ」

その後、女は気の抜けた様な溜め息を付き、胸ポケットから一枚のハンカチを取り出し、頬辺りを軽く押し当て始めた。真っ白のハンカチに緑の斑点が新たに模様付いていく。

数回押し当てた後、ハンカチを口に銜え、今度は胸ポケットから一つの四角い黒のライターを取り出し火を灯した。バーナーのような激しく火を吐き出す音が微かに聞こえるも、その場所からは火柱は立っており、ぼんやりとした灯りだけが女の顔を照らし出している。

女は銜えたたまのハンカチをライターの火元に当て、火を移した。チリチリと燃え始めたハンカチは次第に登り出し、口元に辿り着く前に離す。

ゆらゆらと落ちる火は地上に着く前に姿を変え、そして俺の前で消えた。その光景を茫然と見ていた俺の耳にある音が聞こえた。

「……っ！？」

戻される視界。耳に残る煉瓦を踏みつける音に釣られ顔を上げる。そこにはあの目があった。じっと見下ろしたまま、まるで他人の死体、いや、あのカマキリと同じ、そう、死にかけ悶え、必死に立ち

上がるとする虫を楽しくも悲しくもどちらともない感情で恰も遠くから見ているような冷たい目。そんな目で俺を見ていた。女は見つめたまま口を閉じ、何かを喋りだす気配はない。

その態度に対し俺は、目を逸らす事が出来ず、無言のまま見返していた。蛇に見込まれた蛙、とはこの事を言うのか？ 本当に体が動か……、その時だ。

「……………」

ふと見返していた目に、妙な引つ掛かりを覚えた。この目……、確か何処かで……。

「動くな」

「……………」

突然の言葉に、体が先に反応し、遅れて視線が再び女の顔を捉える。しかし、そこに映されたのは女の顔ではなく、女の指だった。

細い指が四本。うち三本は絡み付くようにがっしりと黒のグリップを握り締め、残り一本の人差し指は、今にも動きたそうにあの場所に掛けられていた。

視線だけを更に少し上に向けると、街灯の光を飲み込む黒の筒が額に向けられているのが微かながら分かる。

——動くな。それが目の前にいる女の第一声。その言葉に、俺は従うしかなかった。絡む指の向こう側に映る目を逸らす事も出来ず、ただ見返……ッ！？

不意に甦る記憶。先ほどまであった引つ掛かりが外れ、同時に冷や汗が背中を伝った。

……当然だ。俺は見たんだ。一度、この目を……。それに、この状況も……。

頭の中で鮮明に映し出されるあの時の映像。『穴闇銀制服紅瞳髪女』入り込んでいた情報が再び現れ、散らばってはそれぞれが形を作り上げる。

これは……、夢？ そう瞬時に疑うも、鼻を刺す血の臭いと腕に留まる熱と痛みが、ここを現実だと再認識させ——。

「……………ッ」

「……………!？」

体が反射的に身構えた。その事に瞼が連鎖反応で閉じるも一瞬でそれは開き、女を捉える。

スカートのポケットに左手を入れた女は、中から手のひらサイズの四角い銀色の何かを取り出し、片手で軽快にそれを開け、慣れた手付きでキーを数回押し耳元に当てた。

電話……………？——安堵。しかし、それは僅かの間。向けられている銃口に変わりはない、あの夢と同じ……………。繰り返され迎える結末に微かに震え始める右腕を押さえ、荒くなる気持ちを落ち着かせた。……………どうか、どうかかならないのか？ 唯一起こり得るチャンス『女が撃たない』それだけを信じ……………、く、来るわけがない！ それこそソレを迎えているようなもの。だが不用意には動けない、どうせ待つなら……………。

女に悟られぬ様、出て来る動揺を隠して待った。見下ろしたままの目と向き合い、来るかもしれないその時を——。

額に銃口、瞳に目を、決して逸らさず事はない女が、

「……………つないでくれ」

静かに口を開いた。

「……………つないでくれ。……………終了だ。……………螭螂だ。……………ああ、前

脚に鎌が付……………一応な。……………暗闇で視界が悪く、場所も広い、公園だ。……………あまみつ、——天光自然公園。そう、なるべく暗い場所で始末した。が、数が数だ。早めの処置を——後……………」

女が言葉を止め、睨むように前を見据える。構えた銃、向けた銃口の先、そこには、一人の男がいた。

髪は黒のセミショート、普段から整えてないのか、あちらこちらから毛が飛び跳ねている。服装である半袖ワイシャツと黒の長ズボンの両方は、どちらもよれよれになり、赤の小さな楕円形の点が所々散り散りに模様付いていた。

公園内に等間隔が設置された街灯達、その内の一つにその男は背を合わせ座り込んでいた。微かに震える右腕を赤く滲む左手で庇うように押さえつけ、じつと女の顔を見る。額から汗を浮かばせたその表情は険しい。

「……見られた——奴も頼む。……ああ、全部——選りも選ってアイツに……、目標……、分らない。だが、誘導の線は薄いと見ていい——理由は後で……。どっちにしろ変わりはないだろ？ 消す事自体に——」

言葉と同時に作ったほくそ笑みを、女が態とらしく男に向ける。その表情に男は目を大きく見開かせ、そして力なく頭を落した。顔が髪に隠され、もはや白黒の置物と化した男からは何かをすすする様な音だけが微かに聞こえ始める。

丸まり震える背中を見ていた女の顔からはすでに笑みは消え、今ではあの無表情へと戻り、そして一言、呟いた。

「……弱いな」

女が、溜め息を絡ませながら背中に向けた銃口を下ろす。

「——いや、なんでもない。……私はこの場所で待つ。夜とは言え……」

そう言いながら、女は振り返り、辺りを見渡し始めた。真っ直ぐ伸びた道にそれを照らす街灯。空には月、辺りは覆い茂る木々に囲まれ——それ以外に何も見えない。

「誰かが通らない、とは限らない。もう手配は出来ているんだろ？」

「……場所？ 場所は南と……」

突然、言葉が止まり、女の視線がある一力所で留まった。

「……場所？ 場所は南東。目印は……」

話し終えた後、女は携帯を切り、スカートのポケットへとしまう。無言のまま、ただ一力所だけを見ていた目を左右の道の片方に向け、走り出した。

女が去り、残された街灯は自身の薄暗い灯りで未だに足元を照らしていた。街灯と同じくそこに残された、小さな赤の斑点の主を名

残惜しむように……。

終節：命乞い

「ハアハア、ハアッ！」

突然右足が立ち止まり、

「——いッ——！」

硬いベッドへと寝かしつけられた。頬と手にこびり付く痛みと砂、乾いた草の匂いが鼻の辺りでくすぐる。

「……ああ……ああ」

喉から自然と出てくる濁った声と共にゆっくりと体を上げていく。四つん這いから跪いた様な状態へと変わった時、ふと視界にある物が飛び込んで来た。

幹。それは太くも細くもない普段よく目にする体型。少し荒れた肌は薄黒く、周りの色と同化し溶け込んでいる。時たま聞こえてくる葉の擦れる音が、唯一そこに存在するのだと知らしめてくる。

茫然としたまま、自然と辺りを見渡し始め、そしてある事に気付く。俺は……今何処に……？

女から逃げ出した後、どうやら無我夢中で走り続けていたようだ。改めて辺りを見渡すと、目に映るのは薄暗い景色に、うつすらと生える数本の幹だけ、後は何もない。

自慢ではないが、この場所の土地鑑については強い方だと思っている。幼い頃、霧崎達と遊ぶと言えば、この場所が多かった。よく走り回り、よく歩いた場所。強いて言えば——庭のような。……だが、ここは……？

広がる闇、それは俺の知っている場所の景色ではなかった。全てを飲み込み、全てを消し去る。この世にいるのは俺——ひとり？

「……ッ！？」

突然、後から音が聞こえた。それは今も微かに聞こえている葉を擦り合わせる音ではなく、まるで誰かが土を踏んでいるような音……。

「……………」

口を開け、目を見開き、跪いたままの体勢でその音だけを聞き入る。音は次第に大きさを増し、間隔も短くなっていく。一つ、一つ……。まるで足音のように、こちらに駆け付け一直——音が俺の背中まで止まつ……。た？

その瞬間俺は、

「…………… あああアッー！！」

——走った。それは競技用のピストルを鳴らされたような一瞬。自身の叫び声を合図に、伸ばした片手で幹を握り締め、体を引き寄せその反動で足を踏み出した。

風を切り、闇のを突っ切る中、突如現れる木にぶつかりそうになったが、ギリギリの所で体を振り避ける。何度か足を取られ転びかけるも、決して止まる事なく走り続け、そして遂に見えてきた。

遠くの方でぼんやりと灯る明かり。それを目にした瞬間、自然と速度が上がった。

徐々に縮まる距離、灯りに近付くにつれ、視界に映る暗闇が上下に分かれ青白い光が広がっていく。

もう少し、もうすこ——！？ 突然、右足がバランスを崩し、左肩が沈んだ。

「…………… ツー！！」

咄嗟に踏み込んでいた左足で地面を蹴り上げ、伸びる右足で地面を踏み、また蹴り上げる。それはまるで一つのハードルを飛び越えるように、大きく足を開け、三角飛びの要領で交互に蹴っていき歩幅を戻した。

青白い光まで残り数歩、その目印として目の前に、背の低い木々が現れた。高さは太ももぐらい、道の両脇に植えられ、迫り来る敵を防ぐように壁の如く立ち並ぶ。

あれを飛び越えれば……。前のめりのまま勢いに任せ、そして——飛んだ。

浮き上がる体、縮めた足元から葉を揺らす音が鳴り、青白い光が

全身を包み込む。下には俺を迎えるように赤の煉瓦が敷き詰められ、そこに向かい自然と足が吸い込まれるように落ち始める。

——が、しかし、

「……えっ——」

色が変わった。

「——ッ！」

叩きつけられると同時に、背中に痛みが走り、気付くと俺は仰向けに寝ていた。目に映る色は黒。胸元に残る締め付けられたような感覚、一体何が……？ 痛む体を起こしながら、胸元の服を引き、襟の違和感を直す。

地面に手を付き、立ち上がった時、ふとある光景が目に入った。

上下に切り裂かれた闇、その間に一人の影、距離にして数メートル——あの女だ。黒くハッキリとは見えないが、右腕をこちらに向け伸ばしている仕草から、次に起こるであろう行動が感じ取れる。

震える足が自然と後退りを始める……が、それはすぐに止まった。頭に浮かんだある一つの言葉が止めたのだ。

——逃げ切れない。

前は光、後ろは闇。このまま突っ込んで行けば、撃たれるのは見えている話。だから、闇に揉まれまた逃げ回れば一時的に凌げるはず。

……だが薄々分かる、そうした所でどうせ無駄に終わる事、もう一度あの光に戻れない事——あの女がいる限り。

女は動かずに居る、右腕をこちらに伸ばしたまま。

待っているのか？ 近づくのを……、だったら尚更……。どちらに向かつて逃げ切れる可能性は高いとは言えない。しかし、可能性が零だとも言えない。

俺は覚悟を決め、振り返り走った。闇に向かい、光を目指して——。

女は銃を構え、暗闇で動く影を狙う。それに気付いたのか、影は

ゆらゆらと動きながら少しずつ暗さを増し、そして静かに消えていった。

「……はぁ……」

消え去った後、しばらく闇を見つめていた女は呆れたような溜め息をつき、銃口を下ろして一步踏み出した。

次の瞬間、

「……！！」

突如砂が現れ、瞳目掛け飛んで来た。女は咄嗟に顔をそらし、それを避ける——同時、

「……クッ！！」

今度は学生服の男が現れ、女に向かって突っ込んできた。

不意に体当たりを食らわされた女はバランスを崩し、背中から木の壁に倒れ込む。女の体は木々をへし折り、荒々しく音を上げるも地面に着く事はなく途中で止まった。

一方学生服の男は、

「——うおっ!？」

女と共に倒れるが、上には重ならず弾みで横にずれ、木々に足をとられてはそのままの勢いで煉瓦の敷き詰められた道にへと流れ出た。

「……いッ!!」

頼りない声を上げ煉瓦に倒れる。が、直ぐに上半身を起こし、左右を見渡しては這うように立ち上がり、走り出した。

選んだ道は左。煉瓦を踏む音が静寂の中で軽快なリズムとして響く。

「ハア、ハア、ハ……、えっ？」

突然男が倒れた。それはまるで張られた糸を切られた人形のように力を無くし、左足を伸ばしたまま。

男は起き上がり、違和感のある左足に向かい手を這わせる。ズボンの上からふくらはぎの辺りを触れ、気づかされる

「あぁ……あぁ……」

倒れた？ 否——崩されたのだと。

「……ああ、ああ！！ アアアアッー！！」

男は上げた。絶叫とも取れる大声を、力一杯にその場所で。涙を流し、声を上げたままふくらはぎの辺りに手を被せる。しかし、ズボンと指の隙間から止め処なく溢れる鮮血は治まる事はなく、その真つ赤な色を煉瓦に塗りたくっていった。

「……熱した火箸で刺されたような、バットで殴られたような、それとも車で轢かれたような……一つの痛みでも様々な例え方がある」泣き叫ぶ声を気にもとめず、女は淡々とした口調でそう言い、男に向かって足を進める。

「だが、どう例えられた所で実際にその痛みを体験してなければ、到底理解などは出来ない」

足元で女が立ち止まる。右手に握り締めていた銃を男に向け、そして……、

「——さて、感想は？」

不気味な笑みを浮かべた。

「あああああッー！！」

熱い！ 痛い！

赤黒く濡れていくズボン。それを目にした時、一瞬にしてその二つの感覚が脳へと走り、思考力を奪っていった。反射的に右手をふくらはぎに当て押さえるも、指の間からは止め処なくそれは溢れ、ズボンから滴り落ちていく。

「ああああッー！！」

俺は無意識のまま子供のように叫び続け、

「ああああガアッー！！」

突如胸元に重たい何かがぶち当たり、反動で体が倒された。

「グッ！」

後ろから鈍い音が上がり、後頭部に痛みが走る。その衝撃は強く、一瞬意識が朦朧とするも、気絶している間もなく俺は目を開けた。仰向けの視界に映ったのは、二つの木々の間を流れるように伸び

た暗い空、そしてそれに重なる女の姿だった。

目が自然と見開き、すぐに力を入れ体を起こす——だが、

「——ッ——！」

再び胸元を何かで圧迫され、そのまま地面へと叩きつけられた。重たい物で押さえつけている圧迫感が胸元からヒシヒシと伝わってくる。

咄嗟に手を伸ばし、胸元を押さえ付けている物を退かそうと握り締め、目を開けた。

——足。目の先、俺が握り締めていたのは一本の足だった。白い靴下からすらりと上に向かって伸びる肌色、その先には当然である持ち主、あの女がいた。

女は足下には目を向けず、片手を頬に寄せどこか遠くの方を見ている。

俺は握り締めた手に力を入れた。しかし、女の足はまるで深く打ち込まれ固められた杭のように重く、数センチ所か数ミリ単位とも動かし事が出来なかった。さらには抵抗する俺を嘲笑うかのように、深部へと向い力を入れてきた。

「くっ……ググッ……」

焦らすような遅さに、じわじわと増す苦痛が女の顔を濁らしている。痛みに耐えきれず、俺は握り締めていた手を離れた。

無抵抗の状態、それでも踏みつける足は弱まる事はなく、力が増す度に口から自然と言葉にならない声が漏れ、目元からは涙がこぼれ続けた。

「力……アガカア……」

……死ぬ？ その言葉が頭の中を過ぎった時、

「カッ……ハアゲホッ、ゲホッゲホッ！」

突然圧迫が解かれ、俺は咳き込んだ。押し掛ける酸素に対応出来ないまま、ぼやけた視界にふと女が映る。

女は立てた左手の人差し指を口元に当て、俺に向かって声を出さずゆっくりと口だけ動かした。

」
その言葉を理解した時、俺は呆気にとられた。

——で、ん、わ。

そう言い終えた後、女は再び顔上げ、何事もなかったかのように、口を動かした始めた。

電話……。それだけの為に苦しめられたのか？ 高が電話一つにこれだけ……。

その事だけが頭の中を埋め尽くし、それを考えれば考える程、胸は締め付けられ苦しさを増していった。話し続ける女を見ていた俺の目に、ふと止まっていた涙が流れた。

「——い」

「……………」

「おい！」

「……………」

女の声？ 瞬きを繰り返し、ぼやける視界を晴らす。微かに晴れた時、そこに見えたのは相変わらず冷たい目で俺を見下ろし、右手を差し伸べるあの女の姿だった。

突然の事に訳も分からず、その手を取らずに見続けていると、痺れを切らしたのか眉間に皺を寄せた女が先に口を開いた。

「——ッ、助かりたい？ 助かりたくない？」

「……………」

その意味を深く理解せず、俺は無言のまま無意識に手を伸ばした。握り締めた右手に力が入ると同時に女が手を引く。俺の頭は浮かび、上半身が起こされる。

手を握り締めたままぼんやりと座り込み、首を左右に振って同等となる壁を見渡す。女が続け様に口を開いた。

「立てるか？」

その言葉に頷く事はせず、握り締めていた手に力を入れた。まるで催眠術に掛けられたように、言葉に流され足に力を入れ、腰を上げていく。

「……痛っ！？」

中間あたりまで腰を上げた時、左足に痛みを感じバランスを崩した。目に入れる足下、垂れる雫、血溜まり、忘れていた俺は――。起こされる今の状況に気付いた瞬間、

「……っ！？」

手を強く引かれ、体が前に出された。勢いに立たされ、次は前のめり倒れて行く。無表情の顔が横を通り過ぎる最中、女が呟いた。

「冗談」

突然踵に痛みが走り、同時に空が映った。

「――ガッ！！」

鈍い音が上がり後頭部に激しい鈍痛が走る。

「ああ……」

痛みと共に現れた吐き気に襲われ、俺は考える事も立ち上がる事も出来ず茫然としていた。薄く開かれている目からは、自然と情景だけが入って来る。

最初に見えたのは――。ぼんやりとしてはつきりとは見えないが、俺の瞳を覗き込むようにして見ているのが分かる。

しばらくすると、白い影は遠ざかり、新たに一つの黒い影が現れた。黒い影は挟むように白い影の反対側に立ち、ゆらゆらと影を揺らせ始める。

「ったあ……、ハ……、った……場し……ぐらい言……、ハア、ハ

……」

途切れ途切れ、男の声が耳に入ってくる。

「……い」

「遅……って、……ち……」

「かす……だ」

「か、か……、大じ………なの……」

「早……」

「あ……」

黒い影が大きくなり、視界が広がった。

「……く逝って……こ……」

「……ンス」

「違……ろ。……あ、やりや……に変わ……いな」

視界が戻ると今度は大きな黒い影の前に小さな黒い影が現れ、それが左右に揺れ始める。

「……とは」

「ま……」

揺れが速さを増す度、視界が狭まって行く。

「……ろそ……な」

「……」

「それ……良い……」

「い……」

僅かな隙間から見える白と黒の影。チカチカと点滅を繰り返し、それが消えた時、あの音が頭の中でひび――。

第二章：潜在

湿った土と木の匂い、天井から滴り落ちる地下水の音だけが静かに支配する深い坑道。大人三人が通れるぐらいの広さしかないその場所に、一人の男がいた。

髪は白。五、六十の歳とは思えないがっしりとした体格に、土まみれの टीーシャツ と破けたブルーカラーの作業ズボンを着用している。

男は両端に造られた木製の支保の前に立ち、何かを打ち付けていた。

「くっ……」

小さな声と共に男が顔を歪め、左腕を押さえる。力を無くし、垂らす腕の人差し指からは、赤い雫が絶え間なく滴り落ち、新たに音を足した。

「……」

男は休む間もなく腕を上げ、また何かを打ち付け始める。

辺りはひっそりと静まり返り、片方の壁に等間隔で備え付けられた薄暗い裸電球だけが、その行動を見続けていた。

しばらくし男が手を止め、支保の間を睨み付ける。

睨み付ける先、そこには幾つもの木の板が張り付けられていた。

「……」

無言のまま隙間だらけ群の一つを触り、今度は自分の横に立てかけてある数十枚の内一枚の板を手に取り、右手に持った釘打機で再び打ち始めた。オレンジ色のうすばけた光を頼りに釘打機の軽快な音が喧しく響き渡る。

「くそ……」

髪の間から滲み出す大量の汗が目元まで流れ、視界を何度も妨げる。男は首に掛けている薄汚れたタオルで汗を拭い、休む事なく打ち続けた。

「——はあ、はあ、はあ」

男の後ろに伸びた坑道から、よれよれのワイシャツを着たスーツ姿の若い男が息を切らしながら走ってきた。

「はあ、はあ、はあ……」

ワイシャツの男は黙々と板を打ち続けている男の手間で立ち止まり、肩で呼吸を数回繰り返して口を開いた。

「はあ、はあ、……や、やはり、どこにも居ませんでした……」

ワイシャツの男が自分の首を締め付けていたネクタイを少し緩める。

白髪の男は手を休めず、ワイシャツの男に向かって静かに言葉を返した。

「……そうか」

「——え、ええ……、そ、そちらはどうでしたか？」

「……」

手を止め、左手で自分の足下を一回指差した後、すぐに打ち始める。それに釣られ、指差した方向に顔を向けたワイシャツの男は、何かを見つけたのか小さく声を上げては、その場所に向かって歩き出し、腰を下げた。目の前に別の男が座り込んでいた。

「奥にそいつがいた。お前の連れだろ？」

「はい、確かに……ですが……」

ワイシャツの男が不安な目を向ける。目の前にいた男は小刻みに体を震わせていた。頭を抱え、歯をガタガタと鳴らしながら、泥だらけの姿で。

ワイシャツの男が震える男の右肩を掴み、軽く揺すってみる。

だが、男からは何の返答もなく、ただ壊れた楽器のように歯を鳴らし続け、体を更に震わすだけだった。

「——困りました。これじゃ、何を訊いても駄目みたいですね……」

はあ……一体何が……」「怯えてるんだよ」

手を止め、新しい板を持ち、別の場所に打ち始める。

「怯えてる？」

「ああ、その様子だと余程恐ろしいモノを見たんだろうな」

「恐ろしいモノ……？ アナタも何か見た——で、だ、大丈夫ですか！？」

白髪の男に顔を向けた瞬間、ワイシャツの男が慌てた様子で立ち上がり、板を押さえる左腕を掴んだ。

「切り傷……止血しないと！」

ワイシャツの男が慌ただしくズボンのポケットを漁りだす。その姿に白髪の男は何も言わず、釘を打つ手を止めた見守っていた。

「っ……どこに入れ……、あ、ありました！ じっとしててくださいね」

そう言ってワイシャツの男は、右ポケットから取り出した四つ折りのハンカチを傷口に巻き始めた。

しかし、あまり馴れていないのだろう。ワイシャツの男は結んでは解き、解いては結びを何度も繰り返し、もたつきながらも結ぼうとしていた。

「——よし、これで一応は大丈夫のはずです」

ハンカチを巻き終えた男は少し満足そうな表情を浮かべ、一歩後方に下がった。

白髪の男が巻かれたハンカチに目を向ける。大きさが合わなかったのか、筋肉質の腕に巻かれていた赤黒いハンカチは傷口の上で直線上に被さり、裏側には小さな蝶々結びで繋がれていた。

「あっ……、す、すみません」

無表情でまじまじとそれを見る男の視線に、ワイシャツの男が気付き、すぐさま頭を下げた。

「どうやらハンカチが小さかったらしく、上手く結べませんでした……、もしきついようなら外して下さい」

「……大丈夫だ」

そう呟き、白髪の男が釘を打ち始める。

「……そうですか。しかし、どうやってそんな傷が？ 何かで切られたような感じが……」

「……小石だよ、自分の投げた小石で切ったんだよ」

「——え？ こ、小石……！？ そ、そうですか……」

思わぬ答えに一瞬困惑するも、ワイシャツの男はそれ以上の事を問わなかった。

「でもまあ、結構深そうな傷なので早めに病院で見てもらった方がいいかも……、感染症もありますし……」

「……よし」

突然白髪の男が声を上げ、同時に釘打ち機を下ろした。軽快な音が止み、静けさが男達を取り囲む。

白髪の男が左手で先ほど打ち付けた木の板を触った。その行動に気付いたワイシャツの男が左手の先に目を向ける。

「——壁ですか？」

男達の目の前には、幾つもの木の板が立ちふさがっていた。一見規則性はなく、乱雑に打ち付けられているも、それは立派な壁としての役割で存在していた。

「これじゃ、もう奥には行けないですよ、良いんですか？」

「……いいんだよ。奥にはそいつ以外に誰もいなかった」

そう言いながら、白髪の男は釘打機を足下に置き、しゃがんでは未だに頭を抱え震えている男の手を引き、自分の右肩へと掛けた。

「……さあ行くぞ、手伝え」

「行くって何処へ——って！」

白髪の男が立ち上がるの見たワイシャツの男が、慌てて片側の手を自分の左肩へと掛ける。

「あ、危ないですよ、そんな腕じゃ、大体どこ……」

「行くんだろ？」

「え？」

「——病院に」

言葉と同時に、白髪の男が一步踏み出した。

「……は、はい！」

それに釣られ一瞬遅れながらも片側の男も踏み出す。

二つの足音に一つの引きずる音を響かせながら、三人は暗闇へと消えていった。

「……悪いな」

薄暗い穴の中、白髪の男が口を開いた。

「——？ 何が……です」

ワイシャツの男が額から汗を流しながら、体勢を直し、肩からズレる腕を元に戻す。

「様子を見にただけなのに、ここまで苦労させるとは……」

「……まあ、これも仕事ですから……ね」

苦笑いを浮かべ、また体勢を直す。

「こうして貴方が居ただけでも良かったです。もし誰も居なかつたら……心細かったですね、二人だけだと。それに、貴方が居なければ、今も一人で帰れずにあたふたしてますよきつと、はは……」

「——悪いな」

「……いえ大丈夫ですよ。それより一つ聞いても良いですか？ ここから出て病院に向かった後、どうするつもりですか？」

「……また戻って来る」

「戻る？ 何の為に？」

「——取り返す為だ」

「……そうですか、本当は戻って欲しくはないのですが、私の言葉で止まってはくれませんかよね。警察には？」

「話した所では信じてくれないだろうし、来た所で無駄に終わる。

それに余計な事をすれば、また困るだろ？」

その言葉にワイシャツの男が苦笑いを浮かべ答えた。

「……それは助かります。——となると……」

「お前はどうするんだ？」

「あつ、ええ〜と、そうですね……、とりあえず一緒に病院に行つて、この人を置いた後、すぐに会社に戻って報告ですね……いつもの流れだと、どう言つて言いましょうか？」

「『居なかった』それと『中が崩れている為、もう使えない』と」
「分かりました、そう言っておきます……」

その言葉を最後に会話は途切れ、二つの足音と一つの地面を擦る音が談笑を始めた。

しばらくしてその談笑に一つの声が混じる。

「……っ、そろそろですね」

目の前に一際眩しく光る明かりが広がっていた。三人の男達は止まる事なく、その光にへと足を踏み入れた。

「……後少しって所ですね」

「ああ……」

光の中、立ち止まる男達の前にドーム状の空間が広がっていた。そこはどこよりも明るく照らされ、広大に広がるその場所には大型の削岩機を始め、穴から伸びる線路や小さなプレハブで作られた休憩所、石の山などあらゆるモノが集められていた。

それに比べ、壁にある鋼で支えられた幾つもの門の先はどれも暗い。

「……え、ええーっと、どれでしたっけ？」

額から汗を浮かばせながら、ワイシャツの男が目を左右に動かす。

「……あそこだ」

見るに見兼ねた白髪の男は少し呆れ顔で一つの穴を指差した。

「……あそこでしたか。それじゃ、行きましようか……」

ワイシャツの男は返事を待ち、

「——ああ」

その声を確認した後、歩き出した。

地面を擦る音を反響させながら、ゆっくりと穴を目指し歩く。時折、二人の間から聞こえる男の呟きを連れて。

「……た。み……あ……なに」

「……何を……と、言ってるのでしょうか」「さあな」

「——でしょうね」

たわいのない会話をしながら、中間辺りまで差し掛かった時、白

髪の方が立ち止まった。

「…………おっと!？」

突然動かなくなった真ん中の男に、足を掛けれたワイシャツの男は声を上げ立ち止まる。

「と、どうしたんですか急に?」

「……………」

白髪の方は真っ直ぐと前を向いたまま動かない。その姿に、ワイシャツの男は何も言わず待った。数十秒後、

「……………すまない。気のせいだ、行くぞ」

じつと見る男の目に気付いた白髪の方はそう答え、歩き始めた。

「えっ、は、はい」

返事をしたワイシャツの男も歩き出す。先程と変わらない音が再び穴を目指し進む。しかし、ワイシャツの男はすぐに気付いた。先程とは変わらないはずの今の違い、歩く速度が速まった事に――。

その速度は微かに速く、お互いになるべく離れず歩いていたが、今ではワイシャツの男が少し引かれる感じで歩いていた。

「わっ、と…………あ、あの」

少し転びそうになり、ワイシャツの男が思わず声を掛ける。その言葉に白髪の方は、足を止めず、言葉で返す。

「なんだ?」

「少しはや――」

ワイシャツの男が白髪の方に顔を向けた瞬間、言葉を止めた。

目に映ったのは、顔。額から汗を垂らすもそれを拭おうとはせず、無表情でただひたすらに前へ進み続ける男の姿だった。

「…………いえ、気のせいでした。早く行きましょ」

そう言った後、ワイシャツの男は顔を戻し、歩幅を合わせた。

目指す穴は徐々に距離を縮め、それが目の前に迫った時、

「……………っと、そろそろ――えっ!？」

突然ワイシャツの男がバランスを崩し、前のめりになった。すぐさま男は体勢を戻し、バランスを崩させた原因に顔を向ける。――白

髪の男が立ち止まっていた。

「……どう」

「先に行ってくれ」

「——え？」

思わぬ言葉にワイシャツの男が呆然となった。

「どうやら……忘れ物をしたらしい」

「わす……後からでは駄目なんですか？」

「……今いるんだ。心残りでな。だから先に行ってくれ、すぐに追いつく。一人でも大丈夫だろう？」

その言葉を合図に、ワイシャツの男に震える男の全体重が押し掛かった。

「わっ！ ぐっ……」

足元がふらつき、倒れそうになるも、男を背負う形でバランスを整える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4946m/>

Luxlunae

2011年11月12日14時58分発行